

「翻訳者の使命」について

林 完 枝

I

翻訳とは一般に理解されているところでは、ひとつの言語から別の言語への置換であり、「意訳」と「直訳」が対比的に用いられる。日本国語大辞典によれば、意訳という語は和製漢語と考えられすでに幕末の蘭学関係の書に見られるが当時は「義訳」(『解体新書』凡例など)が一般的だったようである。意訳が意味するところは、原文の一語一語にとられず全体の意味を汲み取って訳すこと、また訳したもの、と。なお、日本国語大辞典によれば、『解体新書』にいう「翻訳」は日本語に対応する語がありそれに置き換えること、「義訳」は日本語に対応する語

がなく新たに造語して置き換えること、「直訳」は原語の音を漢字や仮名で表わすことである、と。この記述には、十八世紀後半を生きた蘭学者たちの外国語との格闘ぶりが鮮やかに浮彫りされている。しかも彼らの用語自体、今日平然と流通している「意訳」や「直訳」が意味するところとは無視しがたいずれがある。OEDで一度でも単語を調べたひとならだれでも知るように、言葉は歴史や文化を背負っており、時の経過とともに綴りや意味内容・ニュアンスに変化が生じる。まして、別の言語への置換となれば、さらなる変化や差異やずれが生じるのは当然である。翻訳には、原テクストの意味内容が別言語への置換においても著しく損なわれないかたちでの情報伝達が期待されるだろう。

翻訳者は少なくとも二つの言語に堪能であることが大前提で

ある。(とはいえドイツ語からオランダ語に翻訳された『解体新書』の漢文翻訳者たちには、なによりも解剖の知識が大前提とされる。つまり貧弱な語学力をもってさえ専門的知識と執念と時間を総動員すれば偉大な訳業も実現可能となるのである。)したがって、例えば、ナボコフが英語からロシア語に翻訳した『不思議の国のアリス』、ロシア語から英語に翻訳した『エヴゲニー・オネーギン』、ベケットによるフランス語から英語への自作翻訳に、翻訳読者はある種の信用性を与えられる。両作家とも、母国を離れ異国に生活拠点を置くようになってからは異国の言語で本格的に創作活動をするようになった。

「翻訳者の使命」(一九二二)は、ヴァルター・ベンヤミン(一八九二—一九四〇)がフランス語からドイツ語に翻訳したボードレールの『悪の華』所収「パリ風景」出版(一九二三)の際に付された序文である。¹序文であるからフランス語・フランス文学に無知な読者のためにもボードレール理解が少しでもすむようにとドイツ語読者にむけて十九世紀パリや詩人のプロフィールが「分かりやすく楽しく」解説されているはず、などと期待してはならない。ましてや、こうすればあなたも翻訳上手になりますよ、といったスキルアップ指南書でもない。第一段落の終りには、「詩は読者の、絵は鑑賞家の、交響曲は聴衆のために書かれるのではなす」(WBB, 262)とあり、第二段落の終りに、「原作が読者のためにあるのではないとすれば、翻訳はこの関係からどのように理解されるのであろうか?」(ibid,

263)と問題提起する。翻訳とはひとつの言語から別の言語への置換、意味内容の(できれば正確な)伝達であるといった媒介的実用性は、度外視される。ベンヤミンは言語のメッセージ伝達の即時性、言語間の情報コミュニケーションといった社会活動的道具性(「分かりやすく楽しく」受容者に教えてあげること)に関心を示さない。共感なり意思疎通なりをしのばせるようなことは一切回避しようとするこのベンヤミンの姿勢は、彼の文学批評のモットーである、とハナ・アーレントは述べている。(JL, 48)

ベンヤミンは、「翻訳可能性」「死後の生」「後熟」「純粹言語」といった聞きなれぬ用語を用いて論考を展開していくが、だれにでも「分かりやすく楽しい」展開ではない。とはいえ、相対的に分かりやすい箇所もある。例えば、「翻訳可能性はある種の作品に本質的に内在する、——ということ、翻訳がそれらの作品そのものにとつて本質的だということではなくて、原作に内在するある特定の意味がその翻訳可能性においてあらわれることを意味する」(WBB, 264)、「原作の生は翻訳においてその不断に更新される最終的な、もつとも包括的な発展を達成する」(ibid, 265)、「二つの死滅した国語の無感覚な等質化を計るのではなく、原語のあの後熟を沈慮しつつ訳語の生みの苦しみに苦しむことが、あらゆる文学形式のなかでとくに翻訳という形式のもつとも固有の特性である」(ibid, 268)等である。「純粹言語」については、「諸国語のなかの個々の国語によつて

ではなく、それら個々の国語のたがいに補完的な志向の総体によつてのみ達成されうるもの」(*Ibid.*, 268)とある。ソシユールの「ランガージュ」概念に一瞬かすりながらも、アダムの言語、バベル以前の言語にも一瞬かするこの「純粹言語」は、いかにもベンヤミンの言語哲学・歴史哲学の一側面を顕している。以下、少し長い引用となるが、「歴史のメシア的終末」(*Ibid.*, 269)を見据えるベンヤミンならではの論考である。

純粹言語そのものであるあの窮極の本質が諸国語においては言葉とその変容にむすびつくほかないとすれば、それは作品のなかでは鈍重で外來的な意味を負わされている。あの窮極の本質をこの意味から解放すること、象徴するものを象徴されるものそのものにする、言語運動のなかに純粹言語を形成しつゝ再獲得すること、それが翻訳の強烈かつ唯一の力である。もはやなにを言いなにを表現するのでもなくて、無表情な創造的な語としてあらゆる国語によつて意味されるものそのものであるこの純粹言語において、竟に、あらゆる伝達あらゆる意味あらゆる志向は、そこにおいてそれらが消滅すると定められているたひとつの層に達する。そしてまさしくこの層を根拠として翻訳の自由はひとつの新しい高次の権利であることが証明されるのである。そこからの解放こそ忠実の使命であつたあの伝達される意味によつて自由が存続するのではない。翻訳の自由は、むしろ、純粹言語のために翻訳の固有の言語によつて自証する

のである。外国語のなかに鎖されているあの純粹言語を翻訳固有の言語のなかに救済すること、作品のなかに囚えられているこの言語を改作のなかで解放することが翻訳者の使命である。
(*Ibid.*, 276)

ベンヤミンの「翻訳者の使命」はアーレントも述べるように「批評家の使命」でもあり、また最晩年の論考断章「歴史哲学テーゼ」(一九三九—四〇)の「救済の理念」にも通底する。²

II

原語・原テクストに無知でありながら翻訳を読んだだけで(ほぼ正確に)原作を理解したと胸をはって言えるだろうか。(日本語訳あるいは英語訳でベンヤミンを読む私は、彼のテクストの内容を正確に理解できるだろうか、翻訳者たちの苦闘に思いを馳せつつ複数の翻訳書、複数の研究書にあたるとしても)世間でもてはやされる程度の語学力(母国語話者と同じくらいペラペラ喋られる程度によつて評価される言語運用力)があれば、原作を理解できるだろうか。翻訳や要約で分かった気になる読者にとつて、原作の理解とはそもそもどんな意味があるのか。前セクションで論じたように、ベルリン時代のベンヤ

ミンは同時代読者にも後世読者にも「理想的受容者」という概念の肉化に期待をかけてはいないようである。

ドイツ語で書かれた「翻訳者の使命」後半には、マラルメの『詩の危機』からのフランス語原文が引用されている。私が読んだ日本語訳版「翻訳者の使命」では日本語に翻訳されている。(つまりフランス語原文は消去されて日本語訳文に代置され論文全体の日本語訳文のなかに収まっている。ただし「初めに言葉ありき」を意味するギリシア文字・ギリシア語は日本語訳版に温存されている。)フランス語を読めない日本語読者むけへの配慮であろうか。英語版「翻訳者の使命」にはフランス語原文がそのまま引用されているが、同頁脚注に英語訳が付されている。(III, 77) 翻訳作業の慣習の違いか、個々の翻訳者の配慮の違いであろうか。サミュエル・ウイーバーは、ベンヤミンがフランス語原文で引用した一節を、まず一語一語を対応する英語に置き換え英語訳を示し、その後で意味が通じるように英語訳を示す。すなわち、「直訳」と「意訳」の対比が示される。フランス語原文の意味内容はパラフレーズによって(つまり解釈によって説明的に)英語に訳出されるが、それでは、マラルメのフランス語原文にある語順や分詞等詩人特有の意味の伝え方(個々の語が結びあい関連する意味生成過程)は失われる。(SW, Ba, 75-6) とはいえ、諸言語間を往復する翻訳作業という面からすれば、フランス語と英語の血縁性は、文法規則や使用文字の違いに相乗されるフランス語と日本語との距離、英語

とロシア語との距離に比べても、かなり近いのであるが、ウイーバーは主語が置かれるべき文頭に目的語がいきなりやってくる(目的語と認知できるのは、動詞の屈折語尾が後からやってきて初めてである)マラルメのフランス語原文を引用するベンヤミンのやり方に、コミュニケーション媒体を機能させる一般の規則などものともしない言語の懐を見ているのである。

ベンヤミンはボードレールのほかにもブルーストの『失われた時を求めて』全篇のドイツ語訳を、一九二六年夏には友人フランチ・ヘッセルとの共訳というかたちで出版社と話し合い、翻訳作業を進めた。⁴(ちなみに『見出された時』原著の死後出版は一九二七年である。)共訳者二人は『囚われの女』ドイツ語訳完成前に決裂し、ベンヤミンが翻訳した『ソドムとゴモラ』は未出版のまま訳稿も失われた。彼はブルーストのフランス語を翻訳する困難さを友人ゲルシヨム・シヨールムに事細かに語っている。(WBCT, 233-6) 翻訳者としてのベンヤミンは決して原作の意味内容伝達に鈍感だったわけではない。ブルーストのフランス語をどうドイツ語に翻訳するのか、心を砕いたのはたしかである。注目すべきは、今日ベンヤミンの遺した論文のなかでもっとも言及されることの多い論文のひとつ、「複製技術の時代の芸術作品」(一九三五―三九)のフランス語訳出版をめぐる原作者、編集責任者、出版元の見解の相違である。

『評伝』によれば、「複製技術の時代の芸術作品」構想が初めて友人たちへの手紙において言及されるのは一九三五年十月で

ある。ベンヤミンは九月・十月精力的に執筆するが、ドイツ語第一版と呼ばれることになるこの原稿にたいして、十二月、論文全体の改稿に着手した。パリ滞在中のマックス・ホルクハイマーとの会話をうけ脚注を付すこととし、さらにテオドール・アドルノからの政治哲学に関する示唆を受け入れ、ドイツ語第二版を一九三六年二月初めには書き終えた。現存する複数のドイツ語版のなかでもこの第二版はもつとも包括的で重要な論点も明解なので「原テクスト」とも呼ばれることになるが、ベンヤミンはさらに一九三九年三月か四月まで改稿を続けた。(第二次世界大戦の勃発と彼の服毒自殺がなければさらなる改稿がなされていたかもしれない。)一九五五年ドイツで初めて出版された「複製技術の時代の芸術作品」の基となったのは、この第三版にして最終版である。フランス語版は一九三六年五月、原作者の存命中、フランクフルト社会科学研究所の定期刊行物に掲載された。(ibid, 511-2)

ドイツ語からフランス語への翻訳はビエール・クロソフスキーとの共同作業であったが、ベンヤミンはクロソフスキーの仕事ぶりには特に不満をもらしてはいない。彼は、フランス語版はドイツ語版原文の意味するところを正確に伝達している、と評価する一方、フランス語版には、ドイツ語版にはめったに見られない教条的などころがあるとも評している。フランス語版翻訳は一九三六年二月末には終了したが、ベンヤミンは研究所在パリ事務所の責任者ハンス・クラウス・ブリルが原作者に断

りなく「複製技術の時代の芸術作品」に本質的な変更を加えたとして、ホルクハイマーに抗議の手紙を書いた。本質的な変更とはこの論文から「社会主義」という語や政治的言辞を削除したことである。ホルクハイマーは、研究所が現在置かれている立場で刊行物を出版可能とするためには政治的議論に巻き込まれないように配慮しなければならない、と返事した。パリ亡命時代(一九三三—四〇)、生活にますます困窮しつつあったドイツ系ユダヤ人ベンヤミンにとってフランクフルト社会科学研究所からの多方面にわたる援助はなくてはならぬものであり、複数の偽名のもとでドイツ語論文を発表する場もまた狭まりつつあったので、ホルクハイマーに、研究所の方針にしたがう旨の手紙を書いた。(ibid, 520-1)

ベルリン時代にドイツ語で書いた「翻訳者の使命」の第一段落終りには、「詩は読者の、絵は鑑賞家の、交響曲は聴衆のために書かれるのではない」と書いていたベンヤミンは、パリ亡命時代には、作者あるいは翻訳者にとつての読者聴衆と出版する側にとつての読者聴衆と購買者との隔たりに気づかされることになる。ある特定の歴史的背景においては、原作であれ翻訳であれそれが竟に陽の目を見るには、作家や翻訳者以外のほかのどれかが複数黒子として働いているのである。ベンヤミンの作品は、第二次世界大戦後「死後の生」に目覚め「後熟」し、散逸を免れたもの、未完の原稿・断章、パリ国立図書館に収蔵されていた文書群、友人たちとの往復書簡、その他、徐々に回収

され蒐集され、複数の外国語に翻訳されてきた。一九七一年から八九年にかけて彼の母国ドイツで出版されたベンヤミン著作集は、編集者たちによる注釈つきで八〇〇頁近い⁵。彼が改稿に改稿を重ねた「複製技術の時代の芸術作品」と同様、ベンヤミンの仕事は終わりなき「進行中の作品」である。（十五年以上を費やして竟に一九三九年に亡命の地パリで出版されることになるジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』は、直前まで「進行中の作品」で通していた。）

III

翻訳とはひとつの言語から別言語への置換であり、二言語のうちひとつは母国語である。いや、そうとも限らない。ロゼッタ石を例にとれば、石碑文を解読したフランスの言語学者シヤンポリオンは、石碑に並記された三言語・三文字（聖刻文字、民衆文字、ギリシア文字）のいずれをも母国語・日常言語として使用していない。しかし、ギリシア文字・ギリシア語と古代エジプト・古代ギリシアの専門的知識をもってすれば、三文字のひとつ、三言語のひとつに精通していれば、聖刻文字の解読という歴史的偉業を成し遂げられるのである。

「翻訳者の使命」は最後に聖書に言及して締め括られる。す

なわち、「テキストが直接に、意味の媒介なしに、その逐語性において真の言語、真理もしくは教義に属するとき、そのテキストはあきらかに翻訳可能である。言うまでもなく、そのテキストのためにというよりは、ただたんに言語のためにである。このようなテキストにたいしては無限の信頼が翻訳の義務である。すなわち、聖書において言葉と啓示とが緊張なく合一しているように、この翻訳においては、逐語性と自由とが、緊張なく、行間翻訳のかたちで合一しなければならぬ。なぜならあらゆる偉大な書物はある程度、最高度には聖書が、行間にその潜勢的翻訳を含んでいるからである。聖書の行間翻訳はあらゆる翻訳の原型もしくは理想である」(WBB, 278-9)と。聖書への言及の直前に、ベンヤミンは、ヘルダーリンによるソポカレース悲劇の翻訳について、「意味は深淵から深淵へと転落し、竟には言語の底なしの深みのなかに失われようとする」(ibid, 280)と述べている。ベンヤミンはヘルダーリンによる翻訳を翻訳という形式の原型としながら、そこに「拡大され完全に支配された言語の門が不意にしまつて、翻訳者を沈黙のなかに閉じ込めてしまう危険」(ibid, 278)を看取している。すなわち狂気の闇に閉ざされたヘルダーリンの後半生を意識している言述である。このヘルダーリンによる翻訳と彼の狂気に対比して、聖書の行間翻訳が翻訳の原型もしくは理想として提示される。

ヘルダーリンによるソポカレース翻訳やピンダロス翻訳

とは言うまでもなく、ギリシア語からドイツ語への置換である。では、ベンヤミンが言う「聖書の行間翻訳」とは何だろうか。いかなる言語から別の言語へ翻訳された聖書なのか。それはキリスト教聖書のみ限定されるべきか。〔タルムード〕や『クルアーン』にまで拡張するべきか。行間聖書とは原文の行間に訳文を入れた聖書を意味するならば、ベンヤミンにとつて原文とはヘブライ語それともギリシア語、ラテン語か、訳文とは、ルターのドイツ語訳かそれとも二十世紀のドイツ語訳か、むしろ一切具体的に書かれていない。一九二〇年代初めベンヤミンは、パレスティナへの移住と大学での就職口の可能性を視野にシヨールレムが勧めたこともあつて、友人とともにヘブライ語学習を始めるが、初心者レヴエル以上には進まなかつた。しかし、ヘブライ語聖書のヘブライ語・カルデア語辞典、ミドラシュ数巻、預言書二カ国語版、ハシディズム研究書を購入するきつかけとなつた。(WBCJ, 1245) ベンヤミンの意味する「行間聖書」とは、ヘブライ語で書かれた「マソーラー本文」ならどうだろうと素人の私は仮定してみる。シナゴグ内での朗読の便宜をはかり原文の正確な読み方および解釈を後世につたえようとする信者たちによって、本来原文になかつた章や節の区分、母音記号、句読点、アクセント記号、欄外註を付したのが、「マソーラー本文」である。(これは『クルアーン』アラビア語原文の「読み下し」、また日本における漢文の「読み下し」を連想させる。)すでにして解釈、ひとつの翻訳である。

別の仮定もありうる、つまり、「言語と啓示が緊張なく合一する聖書の行間翻訳」の不可能性である。行間にはなにも書かれていない(かもしれない)。「翻訳者の使命」のドイツ語は *Die Aufgabe des Übersetzers* であるが、*Aufgabe* には使命・任務の意味とともに放棄・断念の意味もある。(ほかにも、引き渡し・投函の意味もある。英語訳タイトルにある *ask* の意味とはかなりずれる。)さらに、日本語では「行間翻訳」と訳されているが、英語訳では *the interlinear version*、ドイツ語原文は *die Interlinearversion* である。*Übersetzung* (翻訳、向こう岸に渡ること)と *Version* (表現法、叙述、異本)はどれほど近いのか、遠いのか。ベンヤミンは「決して書かれなかつたものを読む」(一九六六年、ドイツで出版された「模倣能力について」の一節)とまで言いのける思想家である。⁷⁾

キリスト教聖書には、身元を確認できる唯一の原作者によつて単一の言語で書かれた単一の原文があるわけではない。「死海文書」の存在が啓示するように、その実態は、時間的にも空間的にも広範囲に涉つて伝承され転写され解釈され校訂され編集され複数の翻字を経て幾つもの言語で翻訳されてきた膨大な文書の集積である。ひとつの言語から別の言語への置換は一回限りではない。世界に存在する諸言語(もはや日常生活では使用されない言語も含めて)の間を二千年以上も往還するテキストは、すでにしてもはや「行間翻訳」ではあるまいか、言語と啓示が緊張なく合一することがなくとも。

翻訳はひとつの言語から別言語への置換であるが、両者の違いが歴史的時間による変容であるがゆえに「古文の現代語訳」というかたちの翻訳もある。『源氏物語』は古い日本語（十一世紀前半）で書かれており、執筆期間は一〇〇四年から一〇一一年と推定される。⁸ 原作者は紫式部（九七三頃・一〇一四頃）とされるが、彼女がこの長編すべてを書いたわけではないという説もある。全五四巻説が定着するのは鎌倉期以降であるが、早くから六〇巻説も流布していた。藤原為時の女は今日では紫式部と知られているが、いわゆる本名・実名には辿りつかない。紫の呼称には諸説あるが明確ではないし、式部については父為時および兄惟規二人とも式部丞になったことと関連があったかどうか不明である。原作者が書いた自筆原文は現存せず写本・伝本のみが伝わり、伝本による本文の違いをただそうとする機運が生じたという。『源氏物語』のもっとも古い注釈本は世尊寺伊行の『源氏釈』である。彼は自分が所持している『源氏物語』本文の行間や余白に注記を書き込み一冊にまとめたが、さらに研鑽を重ね、増補・訂正し新版『源氏釈』を世に出した。過去千年以上にわたって、『源氏物語』は生命体のごとく増殖している。書写・転写する熱心な読者、注釈者、校訂者、保存者、研究者たちによって「後熟」し「死後の生」を生き延びてきたのである。二十世紀になってからは与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子そのほか、錚々たる作家たちが現代日本語に翻訳している。（『源氏物語』英語訳から現代日本語に翻訳された

ケースもある。）イギリス文学でいえば、古英語で書かれた『ベオウルフ』を現代英語に翻訳するケースと似ているだろうか（『ベオウルフ』の写本で現存するのは一〇〇〇年頃のものだけである。）

キリスト教聖書の翻訳・注釈・校訂・研究の世界的伝播に比べれば、『源氏物語』や『ベオウルフ』の翻訳・注釈・校訂・研究は量的に貧弱と言わざるをえないだろうが、私は印刷技術以前の写本、伝本、寄せ集め、断片断章、異本、正典、外典、偽典といった事象に心惹かれる。さらには、粘土版や石版に刻まれた楔形文字、断片断章としてしか発掘されない欠字欠損破損だらけのシュメール語テキスト、アッカド語テキスト、ウガリット語テキスト、それらを解説し欠字欠損破損部分をこれまで蓄積された研究成果や想像力をもって補い復原しようとする考古学者たち、広義の探偵たち、翻訳者たちの言語観には、ペンヤミンの「純粹言語」観にどこか通底するところがあるのでは……そんな妄想に駆られるのだ。私はいつまで経っても「純粹言語」の謎を解けない。もしかして、これは「謎のないスピンクス」かと怪しむことさえある。

最後に『ドン・キホーテ』の原作者と翻訳者について語ろう。⁹ ミゲール・デ・セルバンテス・サベードラは『ドン・キホーテ』前篇の序言において、「予は、一見父親に見えてもじつは『ドン・キホーテ』の継父なのだ」(DQ6) と言っている。父親とは原作者を意味するようである。『ドン・キホーテ』

の出生の（秘密ならざる）経緯は、第九章で明かされる。それは、「わたし」がトレードのアルカナ市場にいるところへ、ひとりの少年が数冊の雑記帳と反古を絹商人に売りにやつてきた」（*ibid.*, 47）この偶然か必然によるものである。雑記帳のうち一冊はアラビア文字であると判つても「わたし」はアラビア語を読むことができないので、スペイン語に通じるモロコ人を捜す。運よくその能力のある男を見つけ、読ませると笑い出し、その理由は「この本の余白に註として書いてあることがおかしかったという返事であった」（*ibid.*, 47）。「わたし」は、このモロコ人に『アラビアの史家シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリによりて記されたる、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』の物語をアラビア語からカステイリヤ語にすっかり翻訳してもらうことにする。したがってこの一人称語り手は、アラビア語からスペイン語への翻訳者でさえないことになる。原作もまた次から次へと人手に渡り（写本であるなら次々と複数の人に転写されときには余白に註を書きこまれ）、アルカナ市場にて竟に「わたし」が買い取ったのである。「わたし」は作者、翻訳者であるよりむしろ校訂者、編集者、黒子の役割を演ずる。日本語翻訳者の配慮によつてか、セルバンテスと明言された作者の「予」と作品の語り手「わたし」は区別されている。前者はセルバンテスのフルネームつきで一六〇五年出版に際してペーハル公爵に献呈し、続いて序言を同時代読者にむけている。後者は、ドン・キホーテの冒険遍歴を読む者たちをあらちこちらへ

連れまわす仕掛けである。（「わたし」の語りは脱線につぐ脱線に明け暮れるトリストラム・シャンディを予表する騙りであろうか。）それにしても、アラビア語で書かれていた雑記帳の余白に書かれていた註には、いかなる言語でなにが書かれてあったのか、「わたし」は明言しない。アラビア語とスペイン語の両言語に精通したモロコ人による翻訳に、余白の註は反映されているのか。私たちが読む『ドン・キホーテ』には「わたし」の注釈・解釈も混在しポリフォニーを響かせる。これもまた、ある種の「行間翻訳」ではあるまいか。

『ドン・キホーテ』前篇は一六〇五年一月に出版され売れ行きも好調であった。一六一四年、アロンソ・フェルナンデス・デ・アベリャネーダと称する作家の『ドン・キホーテ』後篇が出版された。アベリャネーダの正体・身元には諸説あるが、この偽物『ドン・キホーテ』後篇に刺激されてか、セルバンテス作の『ドン・キホーテ』後篇が一六一五年十二月に上梓された。この後篇はレーモス伯爵に献呈されているが、「後篇の名にかくれて変装し、この世をうろつきまわりました、もうひとつの『ドン・キホーテ』が引き起こした」（*ibid.*, 325）不快感を払拭するために本物を書いた、と執筆の意図を述べている。続く読者への序言にも偽物『ドン・キホーテ』後篇への言及がある。本物作者による後篇において、騎士道ロマンスを耽読したあまりに現実と理想（夢、幻想、幻覚）の境を越えたドン・キホーテは、竟には狂気から正気に覚醒し死を迎える。本物作者がも

たらず主人公の死は、偽物作者のさらなる統編執筆を阻止できるかのよう。第七章の終りには、自称ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャから一介の善人、本名アロンソ・キハーナにもどったことの証人になってくれと一登場人物の住職が公証人に頼む場面がある。「シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリ以外の別の作者が、不屈きにも彼を魅了せ、彼の熱しの物語を数限りなくしようとする機会を断ち切ろうとする考え方からである」(*ibid.*, 678)。これに続き、作者シーデ・ハメーテによる自らの驚ベンへの長い呼びかけが引用される。その呼びかけの一節には、「ドン・キホーテはひとり予のために生まれ、予もまた彼のために生まれた。彼は行動することができたし、予はまたこれを書くことができた」(*ibid.*, 678)とある。

『ドン・キホーテ』は粘土版や石版に刻みつけられた断片として発掘され解読されてきたわけではないし、パピルスやオストラコンや羊皮紙に書かれて繰り返し転写されてきたわけでもない。それは印刷術の時代、「グーテンベルク銀河系」の星、技術による複製が可能となった時代の産物である。『ドン・キホーテ』の作者とはだれか、それを十七世紀スペインに遡って探索することにはどの意味があるうとなかろうと、二十世紀にはボルヘスが彼なりのやり方で『ドン・キホーテ』の作者ピエール・メナールを創造する。¹⁰

註

1 「翻訳者の使命」の日本語訳は、『ヴァルター・ベンヤミン著作集 6 ボードレール』(晶文社、一九七九)所収、円子修平訳により、WBBと略記。引用頁を示す。英語訳は、Walter Benjamin, *Illuminations*, trans Harry Zohn, ed and with an introduction Hannah Arendt, preface Leon Wieseltier (New York: Schocken Books, 2007)に『JL』と略記。引用頁を示す。

2 今村仁司『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』(岩波現代文庫、二〇〇〇)において、「たしかに、ベンヤミンの言説はどこをとっても一般の常識からはずれているし、逆説的でもある。彼がいうような〈唯物論〉はかつていちども思想の歴史のなかに登場したことはない。そこにベンヤミンの思想的な〈賭け〉があり、われわれはそこにベンヤミンのすぐれた思想的遺産をみるのである」(同書、一三三)とある。これは居直りとも受け取られかねないが、ベンヤミン読者を激励するものでもある。

3 Samuel Weber, *Benjamin's—abilities* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2008) に『ヤリ』SW, Baと略記。引用頁を示す。

4 Howard Eiland and Michael W. Jennings, *Walter Benjamin: A Critical Life* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2016) に『ヤリ』の『評伝』をWBCと略記。引用頁を示す。

5 David Ferris, *The Cambridge Introduction to Walter Benjamin* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), 136-7.

- 6 『筑摩世界文学大系 1 古代オリエント集』訳者代表 杉勇
(筑摩書房、一九七八)所収、三笠宮崇仁「旧約関係諸書につ
いて」、六五九—六一による。
- 7 Walter Benjamin, *Reflections*, trans Edmund Jephcott,
ed and with an introduction Peter Demetz, preface Leon
Wieselner (New York: Schocken Books, 2007), 336. ドイ
ツ語原文は Was nie geschrieben wurde, lesen である。同書
イントロダクション xxvi においてデメッツは、「古代の人び
とは動物の内臓、天空の星、ダンス、ルーン文字、象形文字
を〈解読〉していたが、ヘンヤミンは魔術なき時代において
事物、都市、社会制度をあたかも聖なるテクストのように〈解
読〉し続ける」と述べている。
- 8 『日本古典文学大系 14 源氏物語』校注 山岸徳平(岩波
書店、一九五八)、四—一六、および『図説 日本の古典 7
源氏物語』著者代表 秋山虔(集英社、一九八八)所収、伊井
春樹「源氏物語」の読者たち 鑑賞と研究の歴史」一六八
—一七九による。
- 9 『筑摩世界文学大系 15 セルバンテス』会田由訳(筑摩書房、
一九七二)により、DQと略記、引用頁を示す。
- 10 Pierre Menard, Author of the *Quixote*, trans James E.
Irby in Jorge Luis Borges, *Labyrinths*, ed Donald A. Yates
and James E. Irby, preface André Maurois (Penguin, 1986),
62-71.